

<p>給餌飼料が富士の介の肉質に与える影響</p> <p>平塚 匡・三浦正之</p> <p>富士の介に成分組成の異なる飼料を 12 週間制限給餌することで、給餌飼料が富士の介の肉質等へ与える影響を検討するとともに、飼料による更なる肉質改善等の可能性を検討した。その結果、粗脂肪含量が高い飼料ほど成長や飼料効率の改善、筋肉中脂質含量の増加が認められ、給餌飼料が富士の介の成長や肉質に影響を与えることが示された。飼料によりある程度の肉質等の調整は可能であることが示された一方、低水温かつ淡水環境下で養殖される富士の介では大幅な脂質含量向上は難しく、飼料による極端な肉質改善は期待できないものと考えられた。</p>	<p>富士の介の IHNV に対する感受性試験</p> <p>小澤 諒・三浦正之</p> <p>富士の介の IHN に対する抗病性に関する知見を得る目的で、ニジマス及びマスノスケを比較対照とし攻撃実験を行った。その結果、ヤマメ由来株、ニジマス由来株ともに累積死亡率はニジマスが有意に高く、一方で富士の介はほとんど死亡しなかった。また現地実証試験においても IHN による大量被害の事例はなく、本試験の結果を支持している。富士の介はマスノスケと同様 IHN に対する抗病性に優れていることが示唆され、養殖する上で歩留まりが良く計画生産を行いやすい種苗になることが期待される。</p>
<p>低魚粉飼料の有効性評価試験-IV</p> <p>小澤 諒・三浦正之・岡崎 巧</p> <p>畜産由来の原料を用いない低タンパク質、高脂質型の低魚粉飼料の有効性を評価するため、成長試験、糞量測定、一般成分分析等、食味試験、IHN ウイルスに対する感受性試験をニジマスで実施した。その結果、飼料効率は通常飼料区と比較して低魚粉区が約 8%勝り、低魚粉区のコスト指数は 83.2 となった。</p> <p>本試験の結果により、本低魚粉飼料の使用により高成長及び飼料コストの削減が期待できるほか、糞量、一般成分等、食味、IHN に対する抗病性に関しても通常飼料を給餌した場合と比較して遜色ないことが示された。</p>	<p>黒色防鳥糸による養殖池の鳥類被害の軽減について</p> <p>青柳敏裕・芦澤晃彦</p> <p>敷地単位での黒色防鳥糸の設置方法について検討した。池の上流から下流方向へ黒色防鳥糸 4m 間隔、設置高 2.1m では当初サギ類の侵入抑制効果はみられなかったが、ゴイサギ 1 羽が防鳥糸に絡まり斃死した後は顕著な侵入抑制効果がみられた。</p>
<p>VPA 及び簡易的な VPA による西湖のクニマス資源尾数の推定</p> <p>青柳敏裕・小澤 諒・谷沢弘将・岡崎 巧・名倉盾・加地弘一・三浦正之・芦澤晃彦・平塚 匡</p> <p>西湖のヒメマス・クニマスの混合資源尾数、クニマスの資源尾数を、簡易的な VPA である坪井らの推定方法及び標準的な VPA により比較した。混合資源の推定値は両方法間で乖離が大きく、ヒメマス成魚放流の影響により VPA の推定値が過大となった可能性が考えられた。クニマス資源尾数の推定値は両方法間で当てはまりがよく、増減の動向もよく近似していた。クニマスの資源動向の評価については坪井らの方法によることで可能と考えられた。</p>	<p>西湖におけるクニマスの産卵環境—IV</p> <p>加地弘一・青柳敏裕・大浜秀規</p> <p>クニマス産卵場礫地にカメラを設置して、クニマスの産卵時期等を調査した。クニマスは 10 月中旬には既に産卵場礫地に来遊していた。また、産卵行動（追尾行動）を行うクニマスペアも確認されたことから、10 月中旬には産卵も開始していると考えられた。クニマスペア数は 1 月下旬以降減少傾向にあり、1 月下旬には産卵盛期を過ぎていると考えられた。クニマスペアは 2 月下旬まで毎日確認されたことから、産卵の終了は 2 月下旬以降と考えられた。過去の調査と同じ場所での湧水の湧出を確認したが、推定湧出量は昨年度に比べて大幅に減少していた。</p>

<p>ヨーロッパウナギによるクニマス卵の捕食実態 加地弘一・青柳敏裕・大浜秀規</p> <p>産卵場礫地の定点カメラ映像を解析してウナギの出現状況等を調査するとともに、クニマス産卵場周辺でのウナギの除去を実施した。ウナギは産卵場礫地に11月中旬から2月下旬にかけて出現した。また、クニマス卵を食卵するウナギは11月下旬から1月下旬にかけて出現した。合計6尾のウナギを捕獲し、そのうち2尾がヨーロッパウナギだった。ヨーロッパウナギ2尾はいずれも産卵場保護区内で捕獲された。これまでの調査結果と合わせると、クニマス産卵場でクニマス卵を食卵しているのはヨーロッパウナギであると考えられた。</p>	<p>生物餌料給餌によるクニマス初期生残率の向上 岡崎 巧・平塚 匡・加地奈々・青柳敏裕・名倉 盾・加地弘一・大浜秀規</p> <p>これまで西湖産天然親魚から作出したクニマス稚魚は、配合飼料への餌付きが著しく悪く、餌付け初期の生残率低下が課題となっていた。</p> <p>そこで、2017年12月に西湖産天然親魚から作出したクニマス浮上稚魚914尾に対し、配合飼料に加え、生物餌料であるブラインシュリンプ・ノープリウス幼生を併用して餌付けを行ったところ、満1歳時の生残率は88.4%に達し、配合飼料のみで餌付けを行った従前の結果に比べ生残率が約3倍に向上した。</p>
--	--